

特集

記紀神話が語る星の神々

西村昌能 (NPO 法人花山星空ネットワーク)

1. はじめに

神話とは、どのような物語であろうか。

「神話とは、仮に、なぜ太陽は毎日東から昇るのかとか、人はなぜ死ぬのかなどの説明できないことを、神の仕業あるいは神の時代に起きたに起源を持つものとして、人々に納得させるものだ・・・。」[1] 「・・・そういう神話の根底にある、もっと一般的な、もっと平生の生活に直接つながっているというような、古代の霊的な観念、そういうものが今日もなお生き続けています。神話はおそらく古代王朝が完成しました時に、その役目を果たして終わっているわけでありませう。」[2]

これらの観点から見ると神話は庶民のもので、大和政権の「歴史」を綴った記紀（古事記と日本書紀）を単純に神話としてみてはいけないといえる。ただし、古事記上巻・日本書紀神代巻には、「神話」と考えて良いものがある。そこで、それら中に星が神として語られる神話の痕跡、現在の民俗学資料、周辺言語と結び付くものがあると考え、神々の名前にあるその痕跡の抽出を試みた。

2. 庶民の天文観

さて、神話を語る庶民の星をみる気持ちはどのようなものだったろうか。例えば、夏の明け方、夜が明ける前、東の空に、次々と冬の星々が一直線に昇ってくるのが見える。これを北尾浩一[3]は「東の空からほどよい間隔で順にのぼってくるプレアデス星団、ヒヤデス星団、オリオン座三つ星、シリウスを時刻や季節を知るための目標として用いることができた。」と記している（図 1）。このように海に生きる海民、耕作する農民、山で生活す

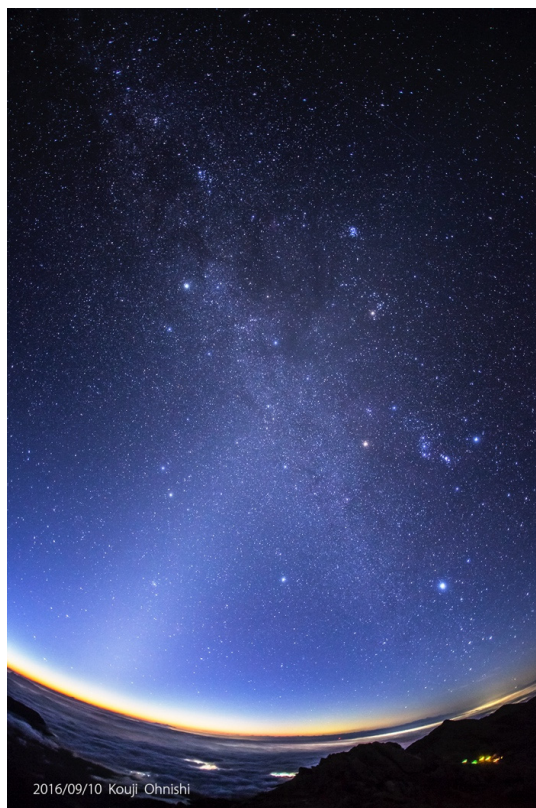


図 1 夏の終わり明け方の東空
スバル、ヒヤデス、三つ星、シリウスが等間隔に並び順に東から昇ってくる。ちなみに天の川に交差する光の帯は黄道光。大西浩次氏 2016年9月10日撮影。

る山民にとって、星は漁獵期、農事の時期、そして時刻を知るための生活のための重要な自然現象であった。よって、私は記紀神話に星の神がいる必然があると考えたのだ。

3. 記紀とは

古事記と日本書紀は一括して「記紀」とよばれる。

古事記（三巻、712年成立）とは、天皇家の正当性を主張したもので、万葉仮名が混じった変体漢文で書かれている。一時は偽書であろうと疑われたこともある。

日本書紀（720年成立）は日本の正史で、もとは「日本紀」とよばれていた。全30巻・系図1巻（ただし、系図は伝わっていない）で、世界、つまり中国を意識し漢文で書かれている。日本書紀以降、5冊の国史が編纂され、これらを六国史とよぶ[4]。日本書紀神代巻では段落ごとに「一書曰（あるふみにいわく）」という最大11ある異説を持つ。制作年代から「風土記」にある地域の伝承も含んでいる。私は、古事記は日本書紀の異説の一つとの立場を取っている。

一般に記紀神話と呼ばれているものは古事記・日本書紀の神代の巻をいう。記紀は前段のモチーフが繰り返しあらわれることが多々あるので、神代巻以降も参照する必要がある。さらに記紀と同様な表現のある「先代舊事本紀」（平安時代初期成立）、「古語拾遺」（807年撰上）及び「風土記」（713年官命）をも参照する必要がある。

古事記と日本書紀に違いがある以上に、異説の多くの物語は作者（日本書紀では、中臣（藤原）氏やその他の豪族）に都合の良いような文章を作っていると見て良い。特に、古代氏族の始祖や氏族が奉仕する祭祀の起源についての記述が多い神代上・神代下は、資料提供者に配慮したものになっているとも言える[4]。

4. 記紀にあらわれる星の神の名

(1) 天香香背男＝天津甕星

私たちは天文に興味を持つものだから、当然のように記紀を読むとき、星や宇宙・天文の記載に興味がある。ところが、いくら読んでも記紀には神代上の最初の部分に宇宙の始まりの行があるだけで、星についてはほと

んど見つからない。その宇宙開闢の話は「淮南子」の引き写しであった（[5]p.89）。

さて、そんな記紀の中にも名前に「星」という字が入る神がある。書紀巻第二第九段（[6]p.120）、出雲の国譲りの行の分注に「一に云はく、二（ふたはしら）の神（フツヌシとタケミカヅチのこと）遂に邪神及び草木石の類を誅ひて、皆已に平けぬ。其の不服なるも者は、唯星の神香香背男（かかせを）のみ。彼、加（また）倭文神（しとりがみ）建葉槌命（たけはつちのみこと）を遣せば服ひぬ。」とある。また、書紀巻第二第九段一書第二（[6]p.136）には、「天神、経津主神・建甕槌神を遣して、葦原中国を平定めしむ。時にこの神曰さく、『天に悪しき神有り。名を天津甕星（あまつみかほし）と曰ふ。亦の名を天香香背男。請ふ、先ず此の神を誅ひて、然して後に下りて葦原中国を發はむ』とまうす。是の時に、齋主（いわひ）の神を齋の大人（いはひのうし）と号す。この神今東国の楫取（かとり）の地に在す。」ともある。先代舊事本紀巻三ではほぼ同じ文章を引いて、この齋主の神は経津主（ふつぬし）としている（[7]p.70）。

さて、この天香香背男によく似た神の名が先代舊事本紀の天神本紀に見える（[7]p.61）。アマテラスは孫、饒速（ニギ（シ）ハヤヒ、記紀ではアマテラスの孫はニニギ）を中国（地上）に降し、地上の支配者としようとした。そのニギハヤヒの天降りに同行させた三十二神に天背男命（あまのせをのみこと）即ち山背久我直達祖及び天背男命（あまのせなをのみこと）即ち尾張中嶋海部直等祖の二神の名が見える。漢字表記では同じ名前でも紛らわしい。なお、先代舊事本紀のニギハヤヒの天降りでは三十二神のほか、「天物部等二十五部人同じく兵杖を帯びて天降供奉る」（[7]p.64.）とある。つまり軍事氏族である物部一族が兵団として同伴しているのだ。さらにこの軍団はいわゆる天磐船に乗って空を航海するのだ

が、その船長・梶取ら六神の爲奈部の祖**天津赤星**（あまつあかほし）がいる（[7]p.65）。書紀では、地上に降り立ったニギハヤヒは中つ国の先住者長髓彦（ながすねひこ）の妹を娶り、後に日向から東征してきた神武と戦うことになる。このことから中つ国（地上）には、先行した天津神がいて、それが高天原に反抗する勢力の存在となったことが暗示される。つまり、天香香背男＝天津甕星は天津神に逆らう地上の武力集団を表したのではないかと考えられるのだ。

(2) ツツの神々

黄泉のイザナミから逃れたイザナギが禊ぎして住吉大神である**表筒男命・中筒男命・底筒男命**が生まれる（書紀卷第一第五段一書第六[6]）。住吉大神は航海の神であることと筒（ツツ）が粒の古語でこのことから火花・星粒の意を表すとも言われる（[6]p.151 注）。三神であることからオリオン座の三つ星とする説がある。住吉の三神も星の神である。

ただし、三浦佑介はウハツツノヲを解説して「(前略)ウハ(上)ツ(の)ツ(津)ノ(の)ヲ(男神)の意で、スミノエノミマエノオオカミ(住吉大社の三神)の一。ツツは星の意とする説が強いが、津守氏の祀る津(港)の神とみる。いずれにしても航海にかかわる神。安曇氏の祀るウハツワタツミと対になって出てくる。(後略)」とし、積極的にツツ＝星の説をとらない[8]。多くの研究者はツツ＝星の説に引かれながらもツツ＝「の津」の方に傾くようだ([9]補注 P.326)。

そこで、ツツが「の津」であるか確かめるため、記紀の中にある様々な「ツツ」の神を調べて見ることにした。

塩土老翁(シオツツノヲヂ)は、記紀に幾度となく出現する神で道案内人の役割を果たしている。シオツツノヲヂは塩筒老翁と書かれることもあり（書紀卷第二第十段一書第四

[6]p.186)、土を筒の字で表す場合はツツとしか読めず星の意となろう。塩は潮である。潮と星なら航海術を表し、老翁は経験豊かな人間、つまり、航海に秀でてた知識人の意味となる（書紀第二第九段一書第四[6]補注 p.151）。

さて、このようにツツを求めて記紀を読んでゆくと書紀卷第一第五段一書第六に行き当たった。第五段の本文が257文字対して一書第六は1218文字あり、他の一書に比べても破格の文字数であり、この一書には読むべきものがあると感じたのだ。

書紀卷第一第四段本文でイザナギとイザナミが島々を産む国生みをし、その後、第五段で海、川、山、木など自然を産んでいく。この場面は一書第六にたいへん詳しく書かれている。つまり物事の由来譚で、本来の神話と違ってよいといえる。

一書第六の最後にイザナミは、カグツチ(火の神)を産んで死ぬ。そこで、イザナギが怒って息子カグツチを剣で滅多斬りにするとその血が天ノ川の河原のたくさんの石になったとある。その中からツツの名を持つ神々が生まれた。剣の刃からしたたった血は**天安河辺**(あまのやすかわら)〈天の川の河原〉にあるたくさんの石塊(**五百筒磐石**(いほついはむら))になったとある。さらに、「即ち此経津主神の祖(おや)なり。」とあり、つまり、この磐石は**経津主**(ふつぬし)神の先祖だという([6]p.42)。

さて、剣のつばからしたたった血からは、甕速日神(みかはやひのかみ)、燂速日神(ひのはやひのかみ)が生まれた。これらはそれぞれ雷の神と火の神といわれているが、甕速日神は、**武甕槌神**(たけみかづちのかみ)の先祖に当たる。剣先からしたたった血は、磐裂(いわさく)、根裂(ねさく)の神になる。次に**磐筒男命**(いわつつのをのみこと)と**磐筒女命**になる。剣の頭からしたたった血からは、閻霩(くらおかみ)(谷の竜神)、閻山祇

(くらやまつみ) (谷の山の神)、闇罔象 (くらみつは) (谷の螭 [みづち]: 水中にすむ一種の竜) になった。そして、この舞台は天安河つまり、天上の世界にある天の川のほとりだったのである。

この後、黄泉のイザナミから逃れたイザナギが禊ぎして住吉大神である表筒男命・中筒男命・底筒男命や阿曇連が祭る底津少童命(そこつわたつみのみこと)ら三神を産み、後に左目を洗いアマテラス、右目を洗いツクヨミ、鼻を洗い、スサノヲを産むことになる。

このようにツツの名を持つ多くの神々が天の川の川辺で生まれたのであった。

(3) 経津主神は星の神か？

ここに出てきた経津主(フツヌシ)は、書紀卷第二第九段本文([6]p.116)ではタケミカヅチと共に出雲平定に活躍する神である。古事記の出雲平定や神武の大和平定では剣の名前(節霊・フツノミタマ)としてあらわれる。このフツという言葉に何か心引かれるものを感じた。それは西村昌能ら[10]が調べた太平洋・東アジアにおける現代の「星」を表す言葉に非常に良く似ているからであった。崎山理[11]は、現代の言語から古代日本語(縄文語)の復元を行い、「星」は“*putsi”(プチイと発音か)とした。彼は縄文語にこの言葉が入ってきたのは、オーストロネシア語族の人々が太平洋に拡散していった縄文中期(紀元前3000年ころ)かと考えている。なお、上古ではフツはプチュと発音されていたようだ。

さて、貴族たちは日本書紀の勉強会を鎌倉時代ころまで実施していた。鎌倉時代に卜部兼方が表した日本書紀の注釈書「積日本紀」が現存している[12]。積日本紀の該当部分には、次のような驚くべきことが書かれていた(図2)。書き下すと、「天書に曰く、経津主の神は天の鎮神なり。その先は諾尊(イザナミ)より出る。初め、諾尊、温突血(かくつち)を斬り、赤霧(血潮)となす。天下陰闇に直ち

に天漢(天の川)に達し、三百六十五度七百八十三の盤石と化為(な)る。これを星度の積と謂うなり。氣、化して神と為る。号(名)を磐裂と曰す。是を歳星(木星)の精と謂う。

(磐)裂、根去(ねさく)を生じ、是を螢惑(火星)の精と謂う。(根)去、磐筒男を生じ、是を太白(金星)の精と謂う。(磐筒)男、磐筒女を生じ、是を辰星(水星)の精と謂う。(磐筒)女は経津主を生じ、是を鎮星(土星)の精と謂う。云々。」となる。つまりこれらの神々は惑星であるというのである。歳星・螢白・太白・辰星・鎮星の五星は漢代以前の中国に基づく物で淮南子([5]p.94)に見られる。奈良時代の知識人は当然知っている用語である。また、漢書天文志第六[13]では、七百八十三星という表現があるので盤石は「星」をあるといえる。< >内は著者の補足である。

積日本紀は日本書紀が書かれてから、600年ほど後の書物である。しかし多くの逸文を

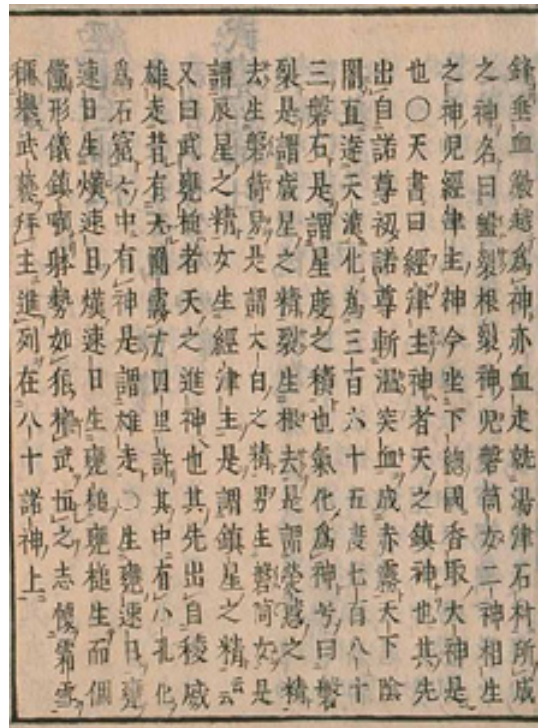


図2 積日本紀該当部分[12]

伝えるものとして貴重な書物であり、代々、卜部家（平野神社神職）が伝えてきた。日本書紀の奈良時代での読みをも伝えている。文中の「天書」は奈良時代の書物である可能性がある一方で、偽書であるという可能性もあるが、いずれにしても、中世以前の知識階級がカグツチの血から星々が生まれたという考えを持っていたとしても、また奈良時代の人々が星の起源がカグツチの血にあるという考えであったとしてもおかしくはないと考える。

このことから「ツツ」は星を表す言葉で**津主神**は星の名を持つ神と見て良い。そして同時に**ツツ**の神々も星の神であることがわかったのである。

(4) まとめ

この論考で明らかになって星の神々をまとめて見よう（表1）。

表1 記紀神話に見られる星の神々

神の名前	出典	氏族 神社
香香背男	書紀卷第二第九段	茨城県大甕神社
天香香背男・天津甕星	書紀卷第二第九段 一書第二	同上
天背男命？	先代舊事本紀天神本紀	山背久我直
天背男命？	同上	尾張中嶋海部直
天津赤星	同上	爲奈部：新羅の船 大工の末裔
表筒男命・中筒男命・底筒男命	書紀卷第一第五段 一書第六	津守氏 住吉大社
塩土老翁・事勝国勝神	書紀卷第二第十段 一書第四	隼人の神？ 鹽竈神社
経津主	書紀卷第一第五段 一書第六	物部氏石上神宮 中臣氏香取神宮
磐裂	同上	不明
根裂	同上	不明
磐筒男	同上	不明
磐筒女	同上	不明

氏族・神社の一部については文献[14]参照

表1のように星に関係する神々は海部系氏族および占い・軍事を掌る氏族と関係するものがあることが示唆された。

文 献

- [1] 大津 透 (2017) 『天皇の歴史 1 神話から歴史へ』, p.97 講談社学術文庫
- [2] 白川 静 (2016) 『文字講 II』 p.12 平凡社
- [3] 北尾 浩 (2018) 『日本の星名事典』, p.006 原書房
- [4] 遠藤慶太 (2016) 『六国史-日本書紀に始まる古代の「正史」』, 中公新書
- [5] 楠山春樹 (1995) 『淮南子』, 中国古典新書 明德出版社
- [6] 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注 (1994) 『日本書紀 (一)』, 岩波文庫
- [7] 大野七三編著 (1989) 『先代舊事本紀訓註』, 新人物往来社
- [8] 三浦佑介 (2020) 『古事記の神々 付古事記神名辞典』, p.270 角川ソフィア文庫
- [9] 青木和夫、石母田正、小林芳規、佐伯有 (1982) 『古事記』 日本思想体系 1 岩波書店
- [10] 西村昌能・TENKYO-ML ☆形チーム (2003) 「連載 星と☆型 第3章 星の名前とその起源」 天文教育 60号 Vol.15 No.1 p.39
- [11] 崎山 理 (2017) 『日本語「形成」論 日本語史における系統と混合』, 三省堂
- [12] 『釈日本紀』
京都大学附属図書館蔵平松文庫
<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00005881>
- [13] 『漢書上卷帝紀表志』 (1977) 小竹武夫 訳 p.277 筑摩書房
- [14] 西村昌能 (2019) あすとろん Vol.45 p.30 及び西村昌能 (2020) 同 Vol.50 p.13

西村昌能